

前作『テレビジョン』から五年の歳月を経てジャン・フィリップ・トゥーサンが世に問うた新しい小説、『愛しあう』の翻訳をお届けする (Jean-Philippe Toussaint, *Faire l'amour*, Minuit, 2002)。

オリジナル脚本にもとづく映画『アイスリンク』(一九九八年)を監督し、旅をめぐるエッセー『セルフポートレート——異国にて』(二〇〇〇年)も刊行しているのだから、五年間の歳月が無為にすごされたのではないことは言うまでもないけれども、トゥーサンの愛読者にとってはやはり、正面から小説に立ち向かった新作が早く読みたいという気持ちは否めなかっただろう。前作『テレビジョン』がトゥーサンならで

はのユーモアあふれる世界の完成形を示すと思える充実した作品だっただけに、次なる展開への興味もまた高まらざるをえなかった。

満を持して発表されたと言っていいだろう本書『愛しあう』は、トゥーサンの新たな挑戦、新たな文学の始まりとして受け止められるべき気概と緊張にあふれた作品である。訳者としてはことさらな解説を加えず、読者にいわば生のまま、この「酸」を含む刺激的なテキストを手渡すことにしたいと思う。デビュー作『浴室』からすでに十七年、時代の潮流と鋭くクロスしながらも悠々と自らの言葉の可能性を追い求めてきたトゥーサンの仕事の精髓がここに凝縮されている。しかも物語の舞台は東京と京都である。ぼくらにとってこれは見逃すことのできない「日本小説」なのだ。もちろん余人にまねのできないあのとぼけた可笑しさも健在であり、従来のファンがひきびきに渴^{かつ}をいやすことのできる出来栄えになっている。しかしそれと同時に、この不思議な味わいを持つベルギー人作家の世界をまだのぞいてみたことのない読者にこそ、本書をおすすめしたいと思う。世の中にはこんな小説もあるんだと驚き呆れていただ

きたい。

昨年リベラシオン紙にワールドカップ観戦記を連載する使命を帯びて来日したトウーサンは、訳者のために刊行間近の本書のゲラ刷りを持参してくれた。夢中で一読した訳者は本書をめぐっていろいろと彼に尋ねた。その際に話してくれた内容を以下に思い出すがままに記し、読者の参考に供することとしよう。

——前作『テレビジョン』はぼくにとって四〇歳記念の本という感じだった。軽やかでユーモラスな要素はあの本、それから映画『アイスリンク』で十分に発揮し尽くしたという手ごたえがあった。だから次の小説はまったくトーンを変えて、攻撃的で辛らつなところのある、もっと重い内容にしたかったんだ。酸味を効かせたかったので、主人公に塩酸を持たせたというわけさ。

別れを決意した男女の話だし、深刻なドラマを扱っているわけだけれども、書いて

いるあいだは不思議なくらい幸福感に包まれて書くことができた。最初は二人の恋の始まりであるパリ編と、恋の終わりである七年後の日本編との二本立てで書いてみたのだけれど、結局パリのほうは捨ててしまうことにした。東京や京都を言葉で描き出すことがとにかくぼくにとっては面白く、やりがいのある仕事だったんだ。この本はとりわけ、光と色を対象とする本だと言えると思う。なにしろ新宿の夜の光は魅惑的だからね。ただし、中に出てくる屋上にプールのあるあのホテルは、新宿のホテルと大阪のホテルを合成して作り出したものなのだけれど。京都の友人の家にもモデルはあるよ。とはいえこの物語がぼく自身の体験を書いたものだというわけではない。

日本を舞台にしたことと、少々危険含みの内容との関連はぼく自身には必ずしもはっきりしないんだ。冒頭の一文を書いたときは、まだ全編を日本で展開するといつてもりもなかったし。ただとにかく、これまで日本にはもう十数回もやってきたわけで、日本とそんなつながりを持つことができたのはぼくの人生に起こった最も素晴らしい出来事なんだ。ぼくとしてはその経験をただちに創作に取り込むのではなく、そこか

ら自然に何かが生れてくるのを待ったほうがいいと思った。その結果ようやく生れてきたのがこの『愛しあう』だったというわけだ。

——数年前、アレクサンドリアでの映画祭に招待されたことがある。その土地のことを少し知ろうという気もあって、ロレンス・ダレルの長編小説『アレクサンドリア四重奏』（高松雄一訳、河出書房新社）を読んだ。映画祭のほうは結局中止になってしまったけれども、おかげでぼくにとっては若いころベケットを知ったとき以来の大発見と言えるような出会いに恵まれた。あの魅惑的な小説にあふれる光や色彩、そして愛の苦しみというテーマが、多少この本に影響を落としているということはあるかもしれない。冒頭に「冬」と書いたのは、ひよつとしたらこれがぼくなりの四部作になっていくかもしれないという気持ちを込めたことなんだ。これまでの本では心理描写は一切抜きというのを方針にしてきた。でもはや心理描写も怖くはないぞという気分になってきて、多少の内面描写を加えてある。とはいえそれも心理を明らかにするためというより、分析しきれない不安定さを生み出すためではあるが。

——『愛しあう』faire l'amourというタイトルが最初はわれながら少々気が引けて、たとえば電話で口にするのがちょっと恥ずかしいということころはあった。いまではもうすっかり慣れたけれども。二語の組み合わせのなかに豊かなニュアンスを込めることができたと思う。そもそももう別れようとしているカップルの話なんだから、そこには反語的な響きがある。むしろ『愛を壊す』défaire l'amourと言うべきところだからね。でも同時にこれは性の営みを描いた作品でもあるし、そもそも「セックスをする」faire l'amourという日常的な言い回しにひそむ矛盾や葛藤を明らかにする物語でもある。動詞を原形で使うのには命令形的な意味もあるしね。シンプルでいい題名だと思っているよ。

そんなトゥーサンの言葉に水を差すのを承知で、実はfaire l'amourというタイトルは日本語に訳すのがむずかしいのですよと打ち明けたことを思い出す。いちばん手っ取り早いのはほぼフランス語にそのまま対応する英語「メイク・ラブ」を用いるこ

とだろう。実際、この本は刊行直後に各国で翻訳が開始され、すでに数ヶ国語で出版されているが、英語版タイトルは Making Love だ。あるいはイタリア語版はこれまた直訳で Fare l'amore。イタリア語版の訳者によると、「こんなタイトルの本を書いてみたいとどんな著者も夢見るし、こんな本を読んでみたいとどんな読者も夢見るような理想の題名」だそうである。

ところが日本語にはそれに相当する表現が存在しないということを、原題を前にして卒然ときとらざるをえなかった。「セックスする」という意味の熟語として日常普通に使われるが、単語の原義を考えてみれば「愛を作る」とか「愛を成す」という意味に読むことも可能。そんなフランス語の言い回しに対応する熟語が現代日本語にはないというばかりではなく、そもそもぼくらは「セックスする」というカタカナまじりの表現以外には、その営みを指し示す「普通の言葉」を持ちあわせていないのである。そうした説明を聞かされてもトゥーサンはいささかも動揺することなく、にこにこ微笑むばかりなのだった（微笑むしかなかったらうとは思うが）。非力な訳者

が頭をしぼったあげく、こうしておくほかないと判断した結果がこの邦題であり、読者にはできるだけ具体的なイメージもこめて邦題を受け止めてくださるようお願いする次第だ。

ワールドカップ観戦という心弾む仕事のためにやってきたのだから上機嫌なのは当然だったが、それだけでなく昨年会ったときのトゥーサンの陽気さは、まだ出版される前の本書を、版元ミニユイ社の社長——故ジェローム・ランドンの娘、イレーヌ・ランドン——が激賞してくれたという喜びゆえでもあったのだった。ジェロームは名編集者として鳴らした人だが、娘の眼力もすでに確かなものようだ。というのも本書は刊行されるや有力紙や読書雑誌の書評でことごとく絶賛を浴び、二〇〇二年秋の最大の話題作の一つとして扱われることになったのである。とりわけル・モンド紙に掲載された長い書評（パトリック・ケシシアンによる）は、「偉大なる手腕を発揮したこの作品によって、トゥーサンの作家としての地位は揺るぎないものとなるだろう

う」という結びの一文により、文学賞受賞を予言するような響きすらあった。秋の新

刊シーズンのクライマックスに有名文学賞がいつせいに発表されるのがフランス文壇の恒例の儀式なのである。あたかも批評家たちの後押しを受けるような形で、本書は四大文学賞のうち三つ（ゴンクール、フェミナ、メデイシス）にまでノミネートされるという異例の扱いを受けた。しかしその結果ひとつの受賞もなく過ぎたのは、むしろトゥーサンらしい飄々とした切り抜け方だったとも言えるかもしれない。なお本書は各賞受賞作に勝るとも劣らない売れ行きを示したのであり、訳者のもとには「賞もテレビ出演もなしでも文芸書が売れることを証明できて満足している」というメールがトゥーサンから届いたのだった。

おびただしく出た書評のうち、本書の魅力をよく言い当てていると思える一例を最後に掲げておく。ベルギーを代表する新聞「ル・ソワール」に出たジャック・ド・テケールによる書評の一節だ。

「『愛しあう』はまるで夜の闇に響く長いサククス・ソロのような小説、消そうとし

ても消えないメランコリーを湛えた小説だ。その音は息が続く限界を越えてもなお保たれ、聴いているほうはもうだめだろうとはらはらするが、大丈夫、最後の最後まで同じ強烈さ、同じ稠密さが保たれる。幕が下りてようやく読者は、自分が最初から最後まで魅了されっぱなしだったことに気づく。そのサスペンスはただ言葉のみによって支えられたものである。言葉の配列の見事なこと、あたかも日本人の得意とする何もない庭に敷かれた石を思わせる」

本書の刊行に合わせて、嬉しいことに著者の新たな来日が決まっている。大阪ヨーロッパ映画祭にゲストとして参加し、同じく大阪で写真展を開催、さらには東京各地で講演会や囲む会が開催される予定である。多くの読者が直接、著者に感想をぶつける機会を持たれるよう期待する。

なお二〇〇三年夏、ベルギー・スネフのヨーロッパ翻訳家コレージュにおいて、二〇〇〇年に引き続きトゥーサンとその翻訳家たちとを結集しての合宿が行われ、『愛

しあう』のテキストをめぐり活発な討議がかわされた。ぼく自身は残念ながら参加することができなかったが、トウーサン愛読者の運営する下記のサイトに掲載された討議の記録を参照して大いに助けられた。興味のおありの向きはアクセスしてみたい
だきたい (<http://www.jean-philippe-toussaint.de/>)

最後に、翻訳作業を力強くバックアップしてくださった集英社の岩本暢人さんから感謝を捧げます。

二〇〇三年九月十五日

野崎 欽